

光吉夏弥の「絵本観」

近藤昭子（頤栄短期大学）

はじめに、『岩波の子どもの本』シリーズは、1953年創刊以来、45年経っているが、そのうち人気のあるものは、ずっと再版され続けている。このシリーズは、普及するという意味では、編者が適確な選択の眼を持っていたといえよう。そこで、編者の一人である光吉夏弥を中心にして、彼のそこに至る経歴、外国絵本とのかかわり等を考察したい。

この論は主に『岩波の子どもの本』の第1期24冊の成立にかかわる点に焦点をあてて検討してみた。

1. 子どもの本との出会い 光吉が、はじめて子どもの本の世界に、登場するのは、絵本の翻訳者としてであった。

1942年（筑摩書房から）『世界傑作絵本集』として『フタゴノ象の子』（アイネズ・ホーガン作）（P.34・表紙25・5X表紙18.5）・『花と牛』（マンロー・リーフ文ロバート・ローソン絵）の2冊と『支那の墨』（クルト・ヴィセ作並画）である。

これらの本が出版されたのは、出版側の要請か光吉側からの提案か定かでない。まえがきに「優れたよい絵本を与えることは、国民の幼いときからの美に対する意識を培ふ」と記されている。

『フタゴノ象の子』は双児の象が主人公の動物絵本である。象の表情、しぐさ、行動の中に子どもの姿を連想させられる。絵は淡いシックなグレー・グリーンの線画で描かれている。右開き、カタカナ縦書きである。この書は後に『岩波の子どもの本』で『まいごのふたご』（アイネズ・ホーガン作野口弥太郎絵石井桃子訳）の中の1編として入っているのと同じである。巻頭部と最後の部分の両著の訳は別紙資料の通りである。

相違点をみると、文章は光吉訳が丁寧にされている。絵は筑摩版のホーガンの描き方が新鮮である。総合的にみると、光吉訳の方が絵本として評価できる。

『支那の墨』は支那の子どもの生活をドイツ人のヴィーゼが見聞して、わかりやすく書いたものの翻訳である。あとがきに「新しいアジア建設のために支那を知ることが私たちの大きな課題」又「外国の本を訳して日本の子供に与える場合、それをどう与えるか」が大切なことを述べる。大東亜建設のための子どもの本としての選定に強い時代性を感じさせる。

1943年に出版された『支那の夜ばなし—龍王の

話』（実業之日本）は、ウオルフラム・エーベンハントのChinese Fairy Tales and Folk Tales, A.M.フィールドのChinese Fair Talesの中から選んでおり『不思議な五人兄弟』がその中にはいっている。

先にあげた『支那の墨』のあとがきで、ヴィーゼの著書に『支那の五人兄弟』があることが記されている。Something about the Author によると

She told the story, "The Five Chinese Brothers" to a New York audience, was pleased with her English translation, and decided to write it down.

つまり子ども達に語ったものを、ビショップが『The Five Chinese Brothers』として書き、それがのちに絵本となったことがわかる。

2. 『日本少国民文化』時代 「日本児童文化協会」が1940年2月「日本少国民文化協会」に変更されその発足と同時に、幹事の1人として光吉夏弥は加わり、文学部に属した。2年後の6月月刊誌『少国民文化』が創刊される。文学部会は、とくに子どもの本とのかかわりの深い人が選ばれ、役員だけでも百名以上あり、石井桃子もその1員であった。

光吉は『少国民文化』（1944年1月号）に『翻訳者の反省』を発表する。「児童分野における外国文学の摂取がこれまで体系も秩序もなく、あまりに恣意的になされてきた」その理由は「海外の児童文学の文学史的な研究とその世界文学的な把握が欠けていた」と「日本の児童に対して持つ適格性」の検討を強調している。同年5月号に『大東亜少国民文化の建設』Ⅰと6月号Ⅱが掲載され大東亜建設のための子どもの本にすすめ方が記載された。

年代が前後するが、すでに1938年の内務省図書課の子どもの本悪質化のための改善方針は、子どもの本の出版に大きな波紋を投げかけた。絵本については『生活美術』（1942年）「絵本特集」をとりあげたのは、時代の要請に応じたものであったといえよう。しかしその中で波多野完治が「児童図書の改善は絵本に始まり、絵本にリードされた。」と記しているのをはじめ、他にも日本や外国各々の側から、絵本とは何か具体的な絵本の提示、参考文献等を掲載し、時代を超えた論考もあり充実して評価できるものであった。

この雑誌に光吉は「絵本の世界」を発表した。以下

論旨をまとめてみる。

1. 絵本は「一回生産性のものでもな^く」生命性のあるものがよい。
2. 絵本とは、子どもから大人まで鑑賞にたえうる幅のある広い層に訴えるものである。
3. 絵本は愛情で、つくり手の心の中の理想の発露である。
4. 絵本とは絵と文が1つになって作り手のいつくしみが感じられるものである。

又、これから日本のめざす絵本として具体的な内容を示している。例えば、型・版・印刷を今までしていないやり方を試みることに、主題は広がり求められるもの等々である。

さらにすぐれた絵本として、ジャンド・ブリュノフ『パパール』、クルト・ヴィーゼ『支那の五人兄弟』、ドーレア夫妻『オラ』、ロバート・ローソン『フェルデナンドの話』等々を紹介する。

この論で注目されるのは、マンリ・ローフ『フェアプレイ』を「理解しがたい法律、規則、政治などの概念的なものを漫画でもって巧妙に解かれた傑出した絵本」としている点である。また「アメリカ民主主義的色彩が濃厚でそのまま学ぶわけにいかないが、手法、方法は研究されてよい」と記す。

論文以外に『外国の絵本』紹介グラビアページで、のちに『岩波の子どもの本』に加わった『金鶏』（エレーン・ポガーニ文、ウィリー・ボガニー絵）『黒ン坊のサンボー』（ヘレン・バンナーバン作）等も紹介。

3. 「中央公論社」時代 1946年5月に「中央公論社」に入社以後の子どもの本のかかわりをみる。

1946年「新世界童話」として『大統領の形人たち』（アントニオ・ローブルス作赤羽喜一挿絵）（P.60）『キリンの首はなぜ長い』（シートン他著赤羽喜一挿絵）（P.70）（双樹社）（ 14×21 ）がある。前著は、ファンタジー作品で戦後復興の時代と合致している。

あとがきに「新しい夢と新しい思想が敗戦にうちひがれた日本の子どもたちに何かを与えうのなら、特別の選択のもとにこうした話の提供をつづけていく」と記す。

1948年『王さまのクリーム』（フランセス・スターレット作熊田五郎挿絵、桜井書店）『こどもかい文庫』（P.16. 12.5×18 ）がある。

同年『ちんちん小袴』（小泉八雲作初山滋挿絵、中央公論社）（P.107. 縦 $18\times$ 横 12.5 ）『ともだち文庫』では、あとがきに「日本が本当に新しくなるためには踏みこえなければならぬものがあり」そのためには「

十分な反省をもって批判的に読む」と記されている。

1948年2月創刊された『少年少女』の編集長に光吉はなる。（～7月）光吉が関係したと思われるものを一部以下に示す。

2月号 こがねのニワトリ（ブーキシンのオトギ話による）（神西清訳ウィリー・ボガニーの絵）（のち『岩波の子どもの本』の『金のニワトリ』の絵と同じものを使用している。）猫にきいた鼠の話（大沢冒助絵）／3月号 こがねのニワトリ・猫にきいた鼠／4月号 チル・オイレンシュエピゲルのいたずら・猫にきいた鼠の話（連載）／5月号 猫にきいた鼠の話（連載）6月号 ジャックと豆の木（清水 絵俳優座脚本杉山誠作）猫にきいた鼠の話（連載）／7月号 この中にあなたはいいか（この話も後に『岩波の子どもの本のなかの『フェアプレイ』（マンロ・リーフ作）の最後の一部を自由に表現したものである）・猫にきいた鼠の話（連載続く）

1949年『世界の絵本』（新潮社）が発刊される光吉は1951年『白鳥の湖』を日本最初のパレエ絵本として出版する。その本の最後には「世界の子どもたちが読んでる絵本」として、『フェ^ルデナンドの話』『パパール』／『エブ^ラハム・リンカーン』／『黒ン坊のサンボー』／『九月姫とうぐいす』／『たくさんのお月さま』／『フェアプレイ』等について述べている。その他に翻訳書として『たくさんのお月さま』（1949年）『エブ^ラハム・リンカーン』（1950年）『サンタクロースの本』（1950年）『りこうすぎた王子』（1952年）『象の本』（1952）がある。

まとめ、光吉はアメリカで出版された絵本の中から同じものを、子どもの雑誌記事でとりあげたり、材料として使ったりしているが、その多くが『岩波の子どもの本』シリーズのなかで採用されている。

光吉の絵本観は、1942年の「絵本の世界」に集約されている。そこで紹介された子どもの本は、光吉の考える子どもの本の基準に合うものであった。しかし、光吉が日本で子どもの本を出版する時、必ずしもその理論を実現したとはいえず、出版の翻訳絵本は版を重ねることもなかった。なぜ「絵本の世界」の論旨が生かしきれなかったかは、光吉個人の歩みだけでなく、出版文化や時代性とのかかわりで更に深めていく必要がある。

今後の課題としては、オリジナルテキストと、光吉の再話の比較などの作業を残している。